

常照

第847号

日、没する処に

日本人の太陽信仰の強さを思う。例えば、年の最初に昇る太陽を特に大事に思い、拝む。太陽崇拜信仰は世界中にあるとはいっても、来たる朝日に間に合うようにと、大勢の人々がこぞって夜中に登山を開始したり、明け方から多くの人々が空に顔を向けている光景は、近代になつた日本でも変わらずに各地で見られている。

日本人の大好きな価値観である

「勢い・エネルギー・補充・始まり」というプラスのイメージを、朝日は私達にくれるからだろう。これはいかに生きるべきかという命題にも繋がっているようで、前向きな生き方が大好きで、これを善しとする日本人には合うのだろう。

ところが『仏説観無量寿経』や真宗でイメージする太陽は、「落日」である。一日の終わりに向かって太陽が隠れ、彼岸を境に冬至に向かつて日照時間が短くなることによつて、消滅・死の観念が生まれる。翌日になれば太陽が再び私達の前に現れてくることを確信しているにもかかわらず、日没は静寂・夜・影・闇・穏やか・精神的、そして終わりのイメージがあるので、なんとなく寂しい気分にもなる。

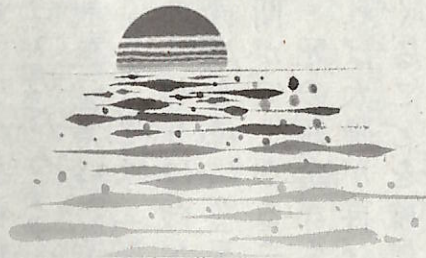
夏の暑い陽光にさらされる季節、日没を迎えると、私はホッとして生き返ったように感じる。日中の少し攻撃的で鋭角的な光に晒されて弱った身体は、太陽が隠れることによって楽になり、気持ちは穏やかに変化して落ち着きを取り戻してくれる。

心理カウンセラーとして、長年いくつかの病院や施設で私は多くの人々と関わってきた。そこで私が聴いてきたのは、「元の自分に戻れないのなら、早く殺して欲しい」という、嘆き訴える声だった。病気になる前の自分、高齢になる前の自分に戻る可能性はないという厳しい事実を認識したときから、生きていきたくないという言葉が発せられるようになる。排泄の問題がでたり、食事をするのに

も誰かの手を借りなければ食べられない、自分の居たい場所で生きることが許されない……。こんな状態になってまで生きていたくないと言うのだ。

特に、家族に金銭的な無理をさせていると感じていたり、迷惑をかけていると感じて生きていく人々の苦しみは深く、自分の存在そのものに否定的になっ

ているという現状を、私は見てきたのだ。誰かの役に立っていない人は存在する価値がないという、世間では当然と考えられている価値観に縛られて人生を送ってきた



のだろう。「前に向かつて何かをする。誰かの役に立つことができ」か価値が見出せないままに生きてきた人々の苦しみである。まさにエネルギーギッシュに何かができるようなイメージの、朝日信仰だけに生きる人々の苦しみのように私は感じてきた。

私達は、夜の静寂や日陰の優しさを知っている。それは終息に向かう寂しさや恐れを含んでいるけれど、落日の価値観を知らなければ、私達は苦しみから解放されるのが難しくなるのではないだろうか。

前向きで、元気で、積極的な生き方を善しと考えるのは、自然なことなのかもしれない。しかしこの価値観だけで突っ走ってきた結

果、私達の世界は、より自己中心的で利便性を追求することだけにエネルギーを使い、誰に対しても何に対しても優しさの欠ける世界にしてしまったのではないか。この生き方は結果として自分自身の苦しみも増幅させているのだ。それは際限のない欲望の追求に結びついていくのだから。

私達には、あの真夏の、強く刺してくる太陽の熱さから救い出してくれる落日、没する太陽から示されるもう一つの価値観が必要なのではないだろうか。

三橋尚伸

(真宗大谷派僧侶・)

産業カウンセラー)

北海道内の公演スケジュール

- 7月31日(水) 帯広市民文化ホール 小ホール
- 8月1日(木) 北ガス文化ホール (千歳市民文化センター)
- 8月2日(金) 小樽市民センター マリンホール
- 8月4日(日) 旭川市公会堂

各会場 14:00開演(13:30開場)
 ご観劇料金 5,500円 **全席自由席**

【チケット取り扱い】

本紙〈常照〉お手次の〈お寺〉又は
 〈劇団前進座 TEL0422-49-2633〉まで

★**前進座特別公演**

花ごぶし

親鸞聖人とえしん恵しん信に尼にさま

親鸞聖人御誕生八五〇年・

立教開宗八〇〇年記念

八月の常例布教(ご法話)のご案内

○前期 八月七日(水)〜十一日(日)

熊本教区 玉関組 正元寺

講師 寺添和南師

○後期 八月十三日(火)〜十六日(金)

兵庫教区 神姫組 光明寺

講師 長谷都子師

○場所 小樽別院内

○時間 午後二時(法要終了後)〜

午後三時半

浄土真宗のみ教えについて布教使にご法話を
 して頂きます。どうぞお誘い合わせいただき、
 ご聴聞に来院ください。席の間隔を保ち、換気
 実施の上、お待ちしております。

発行所

☎047-0017

小樽市若松一丁目四番十七号
本願寺小樽別院

電話 (〇二三四) 二二一〇七四四番
 FAX (〇二三四) 二九一四〇八〇番
 テレホン法話 二七一一六一六番